

俳句通信

特別作品25句 松岡隆子「落椿」
奥坂まや「笑」

特集〈虚〉のイメージの魅力について

「虚と非現実——高浜虚子の場合」
「『写生』はどう更新されたのか——加藤楸邨の場合」
「大根の葉と蟬の殻——三橋敏雄の場合」
「時空のねじれ——田中裕明の場合」
「異界へのいざない——八田木枯の場合」
「虚の目——小宅容義の場合」
「虚のイメージ——大峯あきらの場合」
「『血を曳く犬』から『光る犬』——金子兜太の場合」

坊城俊樹
今井 聖
生駒大祐
仲 寒蟬
角谷昌子
西池冬扇
中山世一
田中亜美

【30句近詠】鈴木五鈴「春田打」

【円熟作家12句】

遠山陽子「キリンの睫毛」
大高霧海「雲を追ふ詩人」
水見壽男「春……夏へ。」
佐久間慧子「二月堂」

●作品● 岩淵喜代子・坂本宮尾・本井 英・小川晴子・
朝妻 力・南 うみを・上田日差し・榎本好宏・
次井義泰・落合美佐子・飯野幸雄・河瀬俊彦・
飯島ユキ・宮谷昌代・三宅やよい・楠田哲朗・
稲田鈴子・上野一孝 ほか

新連載・老いの俳句②

俳句の老人問題 坪内稔典



墓
出
で
て
武
蔵
国
の
土
の
い
ろ

藤本 美和子

冬眠から覚めたばかりの墓の姿を何十匹も見かけた。墓は地中の温度が六度以上になると目覚めるらしい。しかしこんな数の墓をここ片倉城跡で目にするのは初めてのことだ。近くにある雑木林で眠っていたのか。目覚めた墓は自分の生まれた場所、つまり古巣の池や沼に戻って産卵するのだという。それにしても自粛中のわが身に比べなんとも自由。春を謳歌する墓の鳴き声にしばらく聞き入った。



水中のいよよなめらか水草生ふ

鷹羽狩行

湧き水

インスタグラムに婦恋村の泉のことが出ていた。その方、方々の泉の情報を提供されている。以前本誌で、婦恋村の干俣の道端に湧いている泉について触れた。情報によれば、ここより少し進んだ干俣諏訪神社にも湧いているという。昨年初めてここを訪れ、冷たい水をいただいた。広い敷地で、源頼朝が浅間狩の際当社に泊まり、庭で蹴鞠をした由来があるという。この一帯、西にある四阿山からの豊かな水脈の恵みであろう。

いつも車に白樺のこぶで作った取っ手のあるククサカップを用意している。フィンランドの知人からいただいた。寒冷地ではうっかり金属製のカップを使うと唇に引っ付き、唇を痛めることがあるという。木のカップで冷たい湧水を飲むのも一興である。

神社の端には流れがあり、水草の一種の梅花藻が繁殖している。今頃はもう生え始めているに違いない。

絵・文 松本善一



貧なる父玉葱嚙んで氣を鎮む 西東三鬼

玉葱の香り

冬から春先のヘラブナ釣りは四国の徳島が良い。吉野川支流の中小河川や阿南市の桑野川などが釣場で、魚影が濃く流れが緩やかで釣りやすい。大阪からは鳴門海峡大橋を渡り淡路島を縦断すると二時間半程かかる。

二月下旬、桑野川の阿南市の水門を閉じ、水位を一メートル程上げて田畑に水を供給する。耕運機の声や雲雀の声がまだ冷たい風に乗って土手を越えて流れて来る。春の釣りの始まりだ。

三月になると徳島への道中、淡路島の神戸淡路徳島道の南淡市に入る頃、花とは異う個性的で新鮮な玉葱の香りが春霞の様に一帯に広がっていて、車の中にも充滿して来る。春の釣りを大いに期待させる。

淡路島の玉葱は甘みが強く、三月に出回る小さめの新玉葱で作るサラダや「新玉葱丸ごとスープ」は春らしいといっぱいのメニューで大好きだ。

絵・文 杉原武弘



落椿

松岡隆子

日の粒のきらりきらりと名草の芽
芹摘まな小流れに日の躍るとて
三月が来ると泉の音へ寄る
漲るといふこと春の泉かな
覗きみて泉の底の春うれひ
春水の一枚として堰落つる

キリンの睫毛

遠山陽子

層雲を貫くひかり百千鳥

牛の胴引き伸ばしたる春野かな

蛇醒めるころペンキ屋がやつて来る

ヘビクイワシなんと綺麗に歩く春

白い太陽駱駝は宙を嗅ぐしぐさ



とおやま・ようこ

昭和7年(1932)11月7日・東京都生まれ
32年より「馬酔木」「鶴」を経て39年「鷹」創刊に参加 藤田湘子に師事 53年三橋敏雄指導句会「檣」に参加 三橋敏雄に師事 平成15年三橋敏雄研究を主とする個人誌「弦」を創刊 編集発行